

子どもを

まるごと受けとめる

神戸学院大学 法学部教授
佐々木 光明
 Mitsuaki Sasaki

現 在のような、「子ども」観が形づくられたのはそれほど遠い昔の話ではありません。18、19世紀にヨーロッパで産業革命が起き、労働者を支える「家族」が精神的な拠り所として社会的な役割を果たすようになると、子どもは家族の一員として、また次の世代を担う労働力として期待され、社会的にも特別な存在と見なされるようになります。いわば、近代になって初めて「子どもは発見された」(フィリップ・アリエス)のです。それ以前の社会では、子どもは「小さな大人」として扱われ、大人と同じ刑罰さえも科せられていました。子どもの概念が形



成された近代以降、20世紀は子どもの世紀ともいわれ、1901年アメリカで家庭裁判所運動が始まります。法律の世界でも子どもの成長という観点から、大人に適用する刑罰とは違った形で整備されていったのです。

「非行」という言葉がありますが「delinquent」の翻訳で、歴史の浅い言葉です。もともと、産業革命時に都市に溢れた浮浪・貧困層の対処に苦慮した子どもや大人を指すものでした。当時の富裕層は、その一対策として、工場労働力の確保を目的にして救貧運動を展開し、孤児院などを設立しました。これは、安定した社会の秩序を保つための社会政策でもありました。つまり、delinquent「非行」問題は、個人の資質の問題というより、貧困をはじめとした社会が抱える構造的な問題、社会全体で取り組む課題と考えられてきたのです。

翻って、現代の日本社会をみてみましょう。

バブル経済がはじけた90年代初頭から、「豊かさを維持するために」構造改革が叫ばれ、なかでも未来を切り開く次代の子どもの育成のために様々な教育改革

が実施されました。そんな中、教育についていけず、非行を繰り返す子どもに対しては、やり直し



(更生)の時間をあまり設けずに刑罰を重くする傾向が強まっていきました。格差社会の中で大人たちは余裕が持てずに苛立ち、早急に結果を出すことを子どもにも要求します。一方で子ども達は、大人の期待に応えようとして必死になりながらも、心身をすり減らし、疲弊しているようにもみえます。子どもは、いつでも社会から何かを期待される存在でした。

最近、私のゼミで「子どもの刑事裁判、大人と同じでいい!？」と題した市民シンポジウムを開催し、企画・運営、模擬審判のシナリオまでほとんどを学生が担いました。悪戦苦闘しながらも、やり遂げた彼らの姿を見てみると、「成長」を実感できます。こうした例を一つとつても、教育は、じっくり時間をかけ、待ち、互いの関係を作る過程の中で深まるのだと痛感します。

いま大切なことは、子どもを丸ごと受けとめ、一人ひとりに向き合い、コミュニケーションを重ねること。そして、非行や少年犯罪の問題についても一家庭、一個人のみに押しつけずに社会の問題として捉え、法を含めて出来るだけ多様な救済・支援の接点(窓口)を増やすことだと思います。それが、子どもも含めて、人が少しでも生きやすい社会につながっていくのではないのでしょうか。



神戸学院大学

- 有瀬キャンパス / 〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518
TEL.078-974-1551(代表)
- ポートアイランドキャンパス / 〒650-8586 神戸市中央区港島1-1-3
TEL.078-974-1551(代表)
- 長田キャンパス[法科大学院] / 〒653-0862 神戸市長田区西山町2-3-3
TEL.078-691-4888(代表)

URL <http://www.kobegakuin.ac.jp/>

法学部 / 経済学部 / 経営学部	1年次	2年次	3年次	4年次
薬学部(6年制)	有瀬キャンパス	有瀬キャンパス	ポートアイランドキャンパス	ポートアイランドキャンパス
人文学部 / 総合リハビリテーション学部 / 栄養学部	有瀬キャンパス	有瀬キャンパス	ポートアイランドキャンパス(2~6年次)	有瀬キャンパス
学際教育機構	防炎・社会貢献ユニット*	有瀬キャンパス	ポートアイランドキャンパス	有瀬キャンパス
	スポーツマネジメントユニット	有瀬キャンパス	有瀬キャンパス	有瀬キャンパス

※文部科学省現代GP(現代的教育ニーズ取組支援プログラム)採択